

心理的利己主義の再検討

片岡雅知

心理的利己主義とは、人間は自らの利益によってしか動機づけられないとする説である。この説によれば、他人に手を貸したり募金をしたりといった、いっけん他人のためを思っておこなわれているようにみえる行為も、じつは、見返りや評判といった自分にとっての利益をえるためにおこなわれるものなのだとされる。

これまで心理的利己主義は、明らかに誤った説だとみなされてきた。この評価は少なくとも、J・S・ミルに見いだされた心理的利己主義が徹底的に批判された1870年代にまでさかのぼり、以来約1世紀にわたって、心理的利己主義は概念的ないし言語的混乱に基づく説にすぎないという評価が英語圏の哲学者のあいだで定着してきた。

しかし近年、そうした定説の見直しがすすんでいる。一方で、従来の議論は決定的ではなく、心理的利己主義の真偽を概念的探究のみによって明らかにすることはできないと主張されるようになってきた。他方で、心の進化的起源や無意識にかんする研究の発展により、内観では容易に知ることができない動機のありかたについて実証的に研究することが可能となってきた。そこで、心理的利己主義は検討に値するひとつの経験的仮説としてとりあつかわれるようになり、生物学から社会心理学まで様々な経験科学の知見が心理的利己主義を支持するか否かの検討が行われるようになった。本発表ではまず、こうした心理的利己主義をめぐる近年の議論状況を概観する。

ところで、心理的利己主義がもつ規範的な含意については、次のように論じられることが多い。心理的利己主義が正しいとすると、規範理論が要求するような動機を人間はもてないということになるかもしれない。そして、「べき」は「できる」を含意するの原則に従えば、そのような理論は規範理論として不適切である。こうして、心理的利己主義の真偽という事実問題が、規範の問題に間接的にかかわってくることになる。具体的には、動機のありかたを重視する義務論や徳理論は、心理的利己主義と折り合わないと言われることが多い。

しかし本発表では次の点に注目したい。今日、心理的利己主義にかんする議論で問題となっているような意味での動機の「利己性」は、そもそも倫理にとって問題となるような意味での動機の利己性と乖離している可能性がある。そうだとすると、心理的利己主義と規範理論の関係はより微妙なものとなってくるだろう。